

## 議事録

日本学術会議 物理学委員会 IAU 分科会 (第 24 期第 7 回)

日時：2020 年 1 月 27 日 (月) 10:50~12:00

場所：日本学術会議 5-A(1)(2)会議室

出席者：林、渡部、山崎、生田、相川、浅井(skype)、岡村、奥村、梶田、佐々木 (skype)、  
芝井、須藤、田近、常田、観山、新永 (skype)、永原、村山(skype)、深川(skype)、  
藤井

欠席：杉山、千葉、山田

オブザーバー：大栗博司(skype・IPMU)、山岡均、大石雅寿 (国立天文台)

(順不同、敬称略)

(Q) 質問 (A) 回答 (C) コメントをあらわす。

### 1. 国際天文学連合 新会員の審査

山岡氏より、レギュラーメンバーへ 7 名 (うち 1 名は他国籍)、ジュニアメンバーへ 4 名 (うち 1 名他国籍) から応募のあったことが報告された。渡部委員長より資料 1 および推薦状等に基づいて応募者の紹介があり、また、他国籍の応募者が含まれるが所属国は後から変更できるとの説明があった。審議の結果、レギュラーメンバー、ジュニアメンバーともに、応募のあった全員の推薦が承認された。

会員の所属変更について指摘があった。日本は他国と異なり本分科会でメンバー推薦の審議・承認を行っていることから、他国所属で登録されたメンバーが日本への所属変更を希望する場合の手続きを確認すべきとの意見が出された。そこでまずは IAU 側での変更手続きについて、渡部委員長が IAU 事務局に確認することになった。

会員の退会について議論があった。制度上は、定年退職等で会員を辞退したい場合、終身会員ではないため本人が IAU 事務局に辞退の届け出をすれば辞退できるが、本人の意思確認無しに IAU 側が退会させることはできない。一方、会員の人数と分担金が一対一で対応するわけではないものの、分担金を国費で賄っていることを考えると、連絡の取れない方が会員にとどまる状況は不適切であろうとの指摘があった。議論の後、渡部委員長が退会の規則について IAU 事務局に確認し、相談を行うことになった。

C(大石)：費用負担に見合う形で日本のメンバーが実際に貢献し、その活躍が見えているかが問われている。世界への貢献をどうプロモートしていくかの議論が重要である。

C(渡部)：IAU/天文学・宇宙物理学分科会は、ハブルールメートルの法則名の推奨をはじめとし、国内の発信力は高いと考えている。他分野に比べ天文学は論文数を増やしている数少ない分野である。一方で国際的には IAU の役員が少ないといった課題がある。

## 2. 国際天文学連合 100 周年記念事業についての報告

山岡氏より、資料 2 に基づいて報告があった。2019 年 1 月の 100 Hours of Astronomy から 2020 年 2 月の Pale Blue Dot プロジェクトに至るまでのイベントについて、特に日本が参加したものを中心に、実施内容が報告された。

## 3. 太陽系外惑星命名キャンペーンについての報告

山岡氏より、資料 3 に基づいて全体概要と日本での募集・選考の経過に関し報告が行われた。全体では合計 112 の国・地域が参加し、名前の提案・投票には全世界から 78 万人を超える参加があった。各国・地域から提案され、IAU において最終決定された 112 組（恒星と惑星で 1 組）の名前は、2019 年 12 月 17 日の記者会見で公表された。日本では 696 組の提案があり、その中から国内での 2 段階の選考を経て、最終的に主星「カムイ」、惑星「ちゅら」が選ばれた。

## 4. IAU シンポジウム 358 の報告

渡部委員長より、資料 4 に基づいて報告があった。IAU シンポジウム 358 「Astronomy for Equity, Diversity and Inclusion — A Roadmap to Action Within the Framework of IAU Centennial Anniversary」は、2019 年 11 月 12～15 日に国立天文台三鷹キャンパスで開催され、31 カ国から 124 名の参加があった。このようなテーマの IAU シンポジウムの開催は今回が初めてであり、IAU 会長も全日参加した。礼拝室、点字の地図や、好ましいコミュニケーション方法が分かる名札といったインクルーシブな環境を実現するための工夫が多数行われた。天文分野におけるインクルージョン推進のための「三鷹決議(Mitaka Resolution)」については、次回 IAU 総会での承認に向けて文面を推敲中である。

## 5. IAU シンポジウム 360 の進捗報告

新永委員より、資料 5 に基づきシンポジウムの準備状況について報告があった。2020 年 3 月 23～27 日に広島国際会議場で開催予定であり、約 30 カ国から 150 名の参加を見込んでいるとのことであった。アウトリーチ活動として、小中学生を対象とし、シンポジウムの内容に関連した天文イベントも予定されていること、また、IAU Code of Conduct を遵守して会議を運営していることなどが報告された。

## 6. APRIM2023 の招致に向けての進捗状況

渡部委員長より、資料 6 に基づいて報告があった。開催候補地は福島県郡山市ビッグパレット福島に絞り込まれ、日本大学や会津大学のメンバーを含めて LOC を構築しつつあることが述べられた。また、2023 年 6~8 月中の複数の日程案も示された。これらの案に対して意見交換が行われ、日程については他の国際会議や日本人が参加しやすい夏休み期間の可能性を調査し、今後、弾力的に考えることになった。また、IAU 分科会が招致の主体であることを確認した。

日本のプレゼンス向上のために IAU 総会を日本に招致する提案が出された。招致に必要な体制等について意見交換が行われ、今後、本分科会で IAU 総会招致を前向きに検討することになった。また、日本天文学会と本分科会で一緒に推進すべきであり、天文学会総会等での分科会報告の際に述べて、天文学会との相談を開始することになった。

C(岡村)：IAU 総会の日本開催の実現は、招致を決めてから 10 年ほどかかるといった方がよい。これからの天文学では外国との協力が必須になる中、IAU の中で日本人がプレゼンスを示す状況を作るのは重要であると考え。1997 年の総会開催までの記録は IAU Strategic Plan 2020-2030 日本語版の付録に掲載されている。

C(観山)：総会の招致は大変な事業なので、招致活動を積極的に主導できる適切な年代の方々を見つける必要がある。IAU の委員会に若手が入っていくことも必要であろう。

## 7. その他

山岡氏より、例年通り、日本天文学会・全国同時七夕講演会とジュニアセッションについて学術会議の後援手続きを行っているとの報告があった。

以上。